共に生きて

紙面についてのご意見、感想をお寄せください。メール、ファクスで受け付けます。郵送の場合は〒810―8721（住所不要）、西日本新聞生活特報部へ。

生活特報部　FAX 092（711）9056　メール seikatsu@nishinippon-np.jp

小さな命のキセキ 18

登山 万佐子

「生」とは奇跡の連続

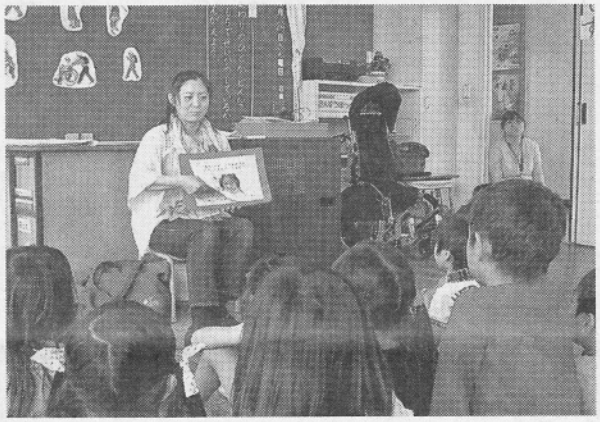
私たち家族の経験を伝えることは、これから同じような経験をするご家族のためにも大事だと思っています。

これまで、未熟児教室や保育所の保護者向け講話、病院や保健所の職員研修会、小中高校生対象の講演会でお話ししました。お供は、平均的な新生児だった長男(14)と、体重452㌘で生まれた長女綾美(8)の出生時の体重と身長を再現してもらった2体の人形です。会場に展示した低出生体重児(未熟児)たちの成長記録の写真パネルと添えられたお母さんの手紙も、たくさんのことを伝えてくれます。

子どもたちには、数億分の1の確率でお母さんのおなかに宿る奇跡、五体満足で無事に生まれる奇跡、元気に毎日を暮らしている奇跡についても話します。私が経験した二つの全く違う出産について話しながら、妊娠10カ月ごろの妊婦の感覚を実感してもらうため、胎児と胎盤や羊水の重さに相当する米袋を抱えてもらったこともあります。

高校生には人工妊娠中絶にも触れました。1991年まで中絶できるのは24週未満(現在は22週未満)でした。娘と同じ在胎23週で断たれてしまった命があるということです。家族会には、母体外での生存限界とされる22週、23週で生まれた子どもがたくさんいて、その子たちの笑い声があふれています。その重みを感じてもらいたいからです。

早産の原因として喫煙や飲酒が挙げられますが、私は喫煙の経験もなければ、妊娠中に飲酒したこともありません。妊婦健診も異常なし。それでも、妊娠、出産には予測しない事態が起きるのです。若い世代に「生まれる」こと、「生きる」ことは奇跡の連続なのだという思いを込めてお話ししています。



綾美さんの小学校の授業で話す登山万佐子さん（中央）

娘の小学校で、小学1年生の道徳の授業で話したことがあります。もちろん2体の人形も一緒。娘が生まれた日のこと。とてもとても小さな赤ちゃんだったこと。6カ月間、家族と離れて保育器の中で数々の治療を受けてきたこと。何度も目の手術を受け、視力が悪いこと。1歳からリハビリを頑張っていること…。

子どもたちは真剣に聞き、たくさん質問してくれました。家に帰って家族と話したのでしょう。「私も保育器に入っていたんだよ」と、翌日教えに来てくれた子どもたちもいました。同じ1年生なのに、自分たちと同じように歩けないことが不思議だった娘のことも「頑張り屋さんなんだね」と受け止めてくれました。

「うちの子が『あやちゃんのそばにいるとホッとする』と言うんですよ」。保護者の方々にこう声を掛けられたことが何度もあります。綾美はそんな不思議な力を持っているのだと感じています。

（「Nっ子クラブ　カンガルーの親子」代表、福岡県筑紫野市）